

平成 20 年度研修員 金山 夏子さんの声

プロフィール

大阪大学大学院国際公共政策研究科博士後期課程で、和平プロセスにおいて市民社会が果たす役割について研究し、平和構築の現場で活躍することを目指していました。海外実務研修では、UNDP シエラレオネ事務所でも活動しました。今後二年から三年間は、引き続きシエラレオネで青年問題を担当しながら、この国の平和構築に携わりたいと思っています。

1. 平和構築人材育成事業に応募した理由を教えてください。

平和構築人材育成事業の存在は、理論、実務経験、就職支援の三つの全側面を重視した画期的な事業として、一期目が実施された 2007 年度から私の関心を大きく引きました。当時、大阪大学大学院国際公共政策研究科博士後期課程に在籍し、和平プロセスにおいて市民社会が果たす役割について研究していましたが、その修了が迫りつつあった時期、卒業後は実務者として平和構築活動の現場に携わりたいことを展望していました。時期を同じくして、本事業の二期目が開始されることを知り、一期生の方々が海外実務研修先や研修修了後の就職先を介して平和構築の多様な分野で活躍されている様子を説明会等で伺い、本事業への関心が一層深まりました。

私が応募を決めた大きな理由としては、次の三点が挙げられます。第一に、平和構築をこれまで研究してきた私のような者にとっても、国内研修のカリキュラムは包括的、且つ、体系的であったため、これまで研究テーマ外であったことから知識の浅かった分野を再度学ぶ機会になると捉えられたことが挙げられます。第二に、カリキュラムのみならず、その講師陣の充実ぶりは何にも代えがたい魅力であり、各分野の第一人者ともいえるべき研究者・実務者の方々を国内外から講師として迎え、直接質問し議論する機会に恵まれることへの期待は、当事業に参加する大きな動機となりました。そして第三に、海外実務研修先、及び就職先の獲得のために研修員として得られる全面的な支援が挙げられます。特に国連といった国際機関は、その組織の中で働き続ける困難さが常に強調されますが、その組織で働き始めるためのエントリー・ポイントにアクセスすることも、同様に容易ではないと実感していましたので、当事業の実施機関が果たす派遣先機関との間のファシリテートの役割は、国際機関での勤務を希望していた私にとって大変に心強いものでした。

2. 国内研修の感想は？

約 6 週間に及んだ国内研修を振り返り、深く感動したこととしては次の二点が挙げられます。

まず一点目に、他の研修員が持ち合わせていた専門的なバックグラウンドの多様性と、それによって深められる日々の議論やシミュレーション実習、そしてそこから得られる様々な実践的な知識と教訓が挙げられます。本事業の開講式当日に配布された研修員一覧を見た際、他の研修員が有するこれまでの学術・実務経験に目を見張り、本事業の研修員の一人となれた幸運をしみじみと実感したことを今も覚えています。そして私が期待したとおり、国内研修では、講義からだけではなく、他の研修員が共有してくれた知識と経験からも多くのことを学ぶことができました。私個人としては、これまで東アフリカのウガンダと東南アジアのインドネシアで NGO に属し、コミュニティー・レベルでの平和構築活動に参加した経験を持っておりましたが、他の研修生の中には、西アフリカや南アジアといった私が足を踏み入れたことのない地域で、国連機関や公的機関で勤務した経験を持つ方もいて、彼らの経験は、私の現場を見る視点を更に深めてくれました。また、アジア諸国からの研修員のほとんどが政府機関で勤務しており、現場ではカウンターパートとなる立場の方々と、平和構築活動の意義を双方の立場から見直す貴重な機会となりました。

そして二点目に、豊かな知識と経験の深さを備えた一流の講師陣が挙げられます。本来であれば、国内外の様々なシンポジウムに何度も参加してようやく接することのできる、一流の、そして多くの学術関係者・実務者を、わずか 6 週間の間で講師として身近に迎えられたことは本当に有難いものでした。講義自体は時間に制限があることから、その分野に関する知識が浅い参加者でも限られた時間内で概要を理解できるよう、包括的な内容となるよう考慮されています。その分、講義後に設けられた質疑応答や交流の場で、更に掘り下げた知識や見解が惜しみなく与えられ、改めて平和構築の理論形成や活動の最前線で働く第一人者の方々と講師に迎えた国内研修の充実ぶりに感動しました。また、そのような講師陣のスーパーバイズの中でシミュレーション実習を行ったことは、自分がこれまでの経験を経て培ってきた考え方が適切であるか、また不十分でないかを認識する機会となり、現時点での自分が有する実践力に自信をつけると同時に、更に向上させなければならない点を明確にすることができました。

3. 海外実務研修での活動について教えてください。

私の海外実務研修は、UNDP シエラレオネの首都フリータウンにある現地事務所にて、2008 年 10 月から開始されました。派遣された際、現地事務所は国内における 3 つの大きな転換――

(1) 民主的な政権の交代、(2) UNIOSIL (国連シエラレオネ統合事務所) から UNIPSIL (国連シエラレオネ統合平和構築事務所) への移行、(3) 長期的な復興へ向けた社会的コンテキストの変化——に伴い、組織改革 (Change Management) と再編成プロセス (Realignment Process) を通じてサービス提供能力を強化しようという取り組みの最中にありました。この背景に沿って、私には (1) 再編成プロセスの履行の支援、(2) ガバナンス・ユニットのプログラム実施の支援、(3) 復興段階に向けた新規プロジェクトの移行・開発の補助が課されました。

第一に、40 人以上の国内および国際スタッフを雇用する人員の再編成プロセスでは、リクルートメントの全過程に関与し、一つのポストに対し応募者が 100 人以上にも及ぶ中から数名のみを絞り込む候補者選択の作業、インタビュー・パネリスト／筆記テスト試験官の設置、採用者との契約、事務所での受け入れ体制の整備、NY 本部との連携といった活動のサポートに取り組みました。

第二に、大統領府を支援する「開かれた政府のためのイニシアチブ (Open Government Initiative)」「公的部門改革 (Public Sector Reform)」「戦略・政策ユニットを通じた大統領府の支援 (Strategic Policy Unit)」「ディアスポラ部門 (Diasporas Affairs)」などのガバナンス・プログラムのサポ

ートに従事しました。シエラレオネ政府の重要なパートナーとして、UNDP に課せられた政府諸機構の構築と能力強化という任務は大変に大きいと言えます。その中核的な事業とも言うべきガバナンス部門では、UNDP のマネージメント・チームとカウンター・パートナー間の調整役として、事業を運営するためのブレインストーミング、意見交換、報告のためのミーティング開催や関連する書類作成の作業に取り組みました。

第三に、「脆弱国家における国家建設」、および「平和・開発ユニット」の「開発のための復興ユニット」への移行に関する UNDP・世界銀行共同ミッションに、UNDP シエラレオネ側のフォーカル・ポイントとしてその実施に取り組みました。このミッションに関与する組織として調整し合わなければならなかった機関は、UNDP 危機予防・復興部門 (BCPR: Bureau for Crisis Prevention and Recovery) ジュネーブ本部、世界銀行本部、世界銀行シエラレオネ



[金山さんと同僚たち]

現地事務所、UNDP リベリア現地事務所、そしてシエラレオネ政府内の大統領府や公的部門改革部などで、これらのアクター間においてミッション・プログラム内容の作成とロジスティックの提供に取り組みました。

4. 海外実務研修の感想は？一番印象に残っていることは？



[金山さんと同僚]

以上のような任務を通して、私は平和構築活動の 3 つの主要な要素である理論・事業内容・実施能力の相互関係の重要性を実践で学ぶことができました。海外実務研修活動の一点目に挙げた組織再編成プロセスの履行を通して、現場における平和構築活動の成果と効率性を決定づける主要な直接要因の一つとして、人員を含む組織的能力がいかに重要である

のかという事実を目の当たりにしました。

二点目の活動である、ガバナンス・ユニ

ットのプログラム実施の支援を通じて、私のこれまでの NGO における平和構築活動の経験とは異なる、政策レベルでの平和構築の重要性と、当事国政府をカウンターパートにすることで伴う大きな挑戦は、国連なканずく UNDP だからこそ課せられたものであることも理解することができました。そして三点目の復興段階に向けた新規プロジェクトの移行・開発の補助に関わり、平和構築の理論が国内の現状や課題に応じたプログラムのポリシーとして、具体的事業の骨組みへと発展する過程に関与できたことで、理論と実務力の双方を有することの重要性を再度認識しました。

各活動・プログラムの目標は高いながらも、私の日々の業務内容と責任は、同僚やカウンターパートとの信頼・自信・チームワークを築くため、十分なコミュニケーションを図りながらの共同の企画立案や、透明性ある運営と財政管理を行うための、地道で忍耐を要するものであったと言えます。しかしながら、国内で最も大きな国際機関の一つである UNDP シエラレオネでこのような活動に従事したからこそ、リソースのみならず関連する全アクター間の信頼やパートナーシップを必要とする紛争後国では、平和構築は最も大きな挑戦の強いられる、現実的な優先課題であるという確信を一層深めることができました。

約 4 ヶ月という期間であったにも関わらず、組織の運営から事業の実施までと様々な側面

に関わらせていただいた中で最も深く印象に残っている点は、これまでに経験したコミュニティー・レベルでの平和構築活動や、その過程の研究調査活動とは全く異なる、現実として直面する国家レベルでの平和構築という課題の重要性とその実現の困難さです。UNDP であるからこそ担うべき国家全体の平和構築活動を支援する責任と、その責任を果たそうとする現地事務所内のリーダーシップによって、パートナーやドナーを巻き込みアイデアが次々と具体的事業へと形作られていくダイナミックなプロセスから大きな触発を受けると同時に、そのプロセスを進めるために不可欠な財政管理や一つ一つのミーティングを充実させていくための努力という、緻密なミクロ・レベルでの作業の積み重ねの必要性、この双方を自在に且つ綿密に操ることのできる能力が、平和構築実務者には不可欠であることを実感しました。さらに、その全プロセスを進めることができるのが、情熱ある平和構築分野の実務者であり、カウンターパートである政府と共に立てた国家の目標を達成するため、大小を問わない日々の様々な課題を乗り越えながら、現場に従事する平和構築実務者の役割を示し続けてくれた同僚や上司に恵まれ、その姿から数え切れない触発を日々受け続けることができました。

5. 今後のキャリア・プランを教えてください。

有難くも私は次の一年間、引き続き UNDP シエラレオネ事務所で勤務する機会をいただき、今は「開発のための復興部門」において「青少年問題」を担当しています。1991 年から 2002 年までに及んだこの国の紛争要因の一つとして、旧体制を引きずる国家と社会への不満を爆発させた青少年の存在が指摘されています。十分な教育と雇用の機会を与えられることなく、将来への希望を抱くことのできなくなった青少年が、反政府ゲリラ集団に扇動され紛争のアクターと化したため、シエラレオネ政府も「青少年問題」を国家として取り組むべき最優先課題とみなしています。

研修で得たことを全て活かし、日々の業務にマクロとミクロの双方の視点をもって取り組みながら、これから取り組みが始まる事業を達成させるため、次の二年から三年はシエラレオネの平和構築に貢献すること目指しています。平和構築分野において、引き続き国際社会からの支援が不可欠であると重要視されている国がシエラレオネであり、組織改革を経た新たな UNDP シエラレオネで働くからこそ、現在の職場は課題が大きい以上に挑戦のしがいがある現場であると考えています。

勤務先として、他の国際機関、国連機関、学術機関、NGO と多様な選択肢がありますが、現時点では UNDP という、当事国の国家と社会に最も大きなインパクトを与えうる可能性とリソースを有する組織において、特に紛争予防と平和の定着の分野で、更に実務経験を積み重

ねていくことを目指しています。

6. 平和構築人材育成事業への参加を考えている方にメッセージ

本事業に参加したことで得られた全ての機会に心から感謝しております。今後のキャリア・プランが明確な場合には、その過程としてはこの上ない追い風になり、一方、方向性はあるものの、具体的な分野や目指すべき組織を今一つ決めかねているという場合には、視野を十分に広げる非常に貴重な機会となります。当事業は「研修」ではなく「人材育成」であるため、時と自分のニーズに応じて、自分の前や横、後ろにと立つ位置を変えて支援してくれるサポーター、私にとってはそのような存在となりました。本事業から得られることは、自分次第でどこまでも広げられます。是非、次の新たなステップとして挑戦してみてください。

平成 20 年度研修員

金山 夏子